

日本農業の今と国際耕種の関わり方

第3回:生産現場からの報告 ～地域生産者グループの活動と地域連携(岡山県牛窓)～

社友である我々の仲間が、岡山県瀬戸内市牛窓で生産農家として地域にとけ込みながら無農薬・無化学肥料による野菜生産を行っている(AAI ニュース 48号参照)。国際耕種の活動と国内農業への接点を見出すため再び同地を訪問し、社友を含む新規参入農家、地元農家、生産者グループ、岡山大学などを中心に聞き取りや懇親会を行った(詳しくは次ページ参照)。今回の調査では、彼らの活動から見出せる地域農業の課題を整理するとともに、その中で国際耕種は何ができるかについて探ってみた。



瀬戸内市牛窓の風景

岡山県瀬戸内市は瀬戸内海に面し、気候は温暖で年間を通して生産活動がおこなえる。近隣には岡山市や倉敷市などの大都市があり、生産物の販売市場にも恵まれた地域と言えよう。懇親会に参加した新規就農の若手たちも瀬戸内市内はもとより、岡山市などの消費者に生産物を直販したり、市場に出荷したりしている。しかし、このような生産環境や立地条件に恵まれた当地でも、地域内には耕作放棄地が拡大しており、また農家の高齢化は他の地域と同様に急激に進んでいる。聞き取りをした若手農家の意見からも10年後、20年後の農業の存続に危機感を持っていることを痛感させられた。若手農家が特に危惧する話として、現在の高齢農家の持つ知識(例えば、農地を概観するだけで病気の発生状況や水環境の変化などが理解できる)の埋没が挙げられた。地域の営農環境に詳しい高齢農家の知識の移転は、若手農家や新規就農者の技術力向上に貴重であり、そのような技術移転の場が必要だとうたっていた。

今回の調査では、高齢農家から直接話を聞けなかったが、ある生産者グループは30軒の地元農家から借地をしており、また社友にも耕作依頼があるように地域社会において若手への期待は大きいと考えられる。地元の若手農業者達によって設立された瀬戸内農業経営者クラブでは、『チーム60%』(めざせ自給率60%プロジェクトチーム)を発足させ、新規就農希望者の応援活動に取り組んでいる。ここでは、就農希望者がクラブ員とともに農作業を行って農業体験をしたり、クラブ員の家に宿泊して農家の生の声を聞いたりしている。しかし、一方で収益の低迷も課題である。生産物の付加価値創出のため、スーパーや自然農産物利用レストランとの提携出荷などを行っており、収益の向上に努力しているが、家族労働だけでは現在の耕作規模を拡大することは困難である。特に、無化学肥料・無農薬による栽培には労働力を多く必要とするため規模拡大による収益アップは容易ではない。

上記したように瀬戸内市の農家・生産者グループからの聞き取りで多くのことがわかってきた。それは彼らはより多くの営農知識の習得を要望しているものの、そのための場(講習機会やそれを行うための場所)に恵まれない、所得向上、規模拡大には多くの労働力が必要だが、現在それを補充する資金が若手農家にはない、労働力の確保、営農技術の移転の観点から栽培研修員等を受け入れる気持ちはあっても、宿泊施設の確保といった準備が整わない、一方で放棄される民家は増えている、利用可能な融資制度も整っており、資金調達には組織化が有効なこともわかってはいるが、現時点でうまく活用できているようには見えない。

今後の農業を支える要素として「担い手の確保」、「技術の継承」、「土地の保全」が重要である。このうち、「担い手」を育てる方策として、若手就農者に対する「技術」は、国際耕種にとってこれまでの野菜栽培技術コース等の経験を活かして取り組みやすい活動であると考えられる。また、『チーム60%』の新規就農希望者の応援活動に対して、放棄家屋の借り上げによる宿泊施設・交流の場の提供という支援を行うことも考えられる。さらに、海外からの研修員の受け入れあるいはJOCV等候補生の派遣前研修の斡旋等による貢献もあり得る。